

認定こども園にじいろ・かっこう幼稚園 研究重点  
心を動かし、思いをもって遊び込む幼児を育むための保育者の援助と環境構成

今回の研究だよりでは、4歳児の実践事例を紹介します。

## 実践事例 4歳児(きりん組) ~AOAO(水族館)を作ってみよう!~



### 保育者の思い

制作の好きな子が多く、空き箱や紙などを使って、バッグやギターなどを作っていました。一方で、バス遠足で水族館に行く前から「ペンギンになりたいな」と話していましたが、遊びの中でなりきって遊ぶ姿があまり見られませんでした。AOAOに行った経験を通して、なりきって遊ぶ経験や友達と共通のイメージをもって制作する楽しさを感じて欲しいと考えていました。

### 【遊びが始まるきっかけ】

バス遠足でAOAO Sapporoに行くことを動画やペンギンのポスターを見て、心待ちにしていた子どもたち。当日はたくさんの生き物を見て、館内の仕掛けに驚き、楽しく出かけてきました。帰ってきてからも「また行きたい」「ペンギンになりたい」など楽しかった気持ちが継続していたので、保育者が「それならAOAOを作っちゃおうか!」と提案すると「やってみよう!」「ペンギンの家はどうやって作ろうか」と意欲をもって取り組む姿が見られました。

## 同じものをイメージできる

遠足でみんなが同じものを見て、共通の楽しさを味わう体験をしてきました。水族館を作り上げていく中で、場の作り方や物の使い方などを巡り、意見が食い違う場面も多々ありましたが、作りたい水族館のイメージは共通していたので、同じ方向性でごっこ遊びを進めていくことができました。また、共通のイメージがあることで、子ども同士で話し合ったり、思いを伝えあったりする姿も見られました。同じものをイメージできることが遊び込む姿につながっていました。



### ペンギンの家の青いマットを巡って…



ペンギンの家には海があったから青いマットは海にしたい。



でも船もあつたらいいんじゃない?

最初、青いマットに対するイメージが個々で異なっており、どちらの意見も尊重しながら関わり、どう展開していくのか見守っていました。



じゃあ、つなげて大きい海にしたらいんじゃない?

ある子の一言で、子どもたちのイメージが共通となり、青いマットは“大きな海”となりました。

他の年齢の子どもたちも水族館ごっこで体験したことをきっかけに新たな遊びに展開していく様子が見られました。

## 遊びが見える環境づくり

「何か面白そうなことをしている」と興味や関心をもつことが「やってみたい」につながっていきます。今回の4歳児クラスの水族館ごっこをきっかけに他の年齢クラスの子どもたちも自分たちの経験とすり合わせて遊びが展開されていきました。

遊びの種類は違っていても思いは共通しているのが感じられました。

### 見たものを表現する(3歳児)

水族館ごっこを体験し、見たものを自分なりに絵で表現して手紙にし、4歳児の部屋に届けてくれました。



### 憧れて自分も海の生き物に

#### (3歳児)

水族館ごっこの準備をしていると情報をキャッチした3歳児が「ほくもくらげになりたい」と自分のクラスの担任と一緒に作ろうと伝える姿がみられました。くらげの衣装ができると4歳児の部屋へ出かけ、その衣装を見せ、海の生き物になりきる楽しさを共有していました。それから毎日そのくらげの衣装を身につけ、水族館ごっこの日を心待ちにしていました。

### 私たちの円山動物園(5歳児)

水族館ごっこに訪れた5歳児も刺激を受け、「私たちも動物園に行った」「動物園を作りたい」と意気込んで帰っていきました。次の日から粘土や折り紙で動物園を作り、展示して保護者や他のクラスの子どもたちに見てもらいました。



## 話し合いから

### ・ちょっとした経験の積み重ね

→得意な遊びや日々楽しんでいることが海の生き物作りに生かされていました。最初は自由遊びの中で個々にブロックや制作で遊んでいたものを保育者が仲立ちとなって、遊びと遊びをつないでいくことで遊びが更に発展すると感じました。

### ・保育者のちょっとした言葉がけ

→ペンギンの家を作った日の朝に保育者が「今日は後で外でも遊べるよ」と見通しがもてるよう子どもたちに声かけをしていました。ペンギンの家作りがひと段落すると、子どもたちは外で遊び始めました。例えばこの一言がなければ、ペンギンの家で遊び続けたかもしれません。保育者の一言が子どもたちの遊びに影響することを改めて感じ、ねらいや遊びの様子に応じて言葉がけも変えていくことが大切であると感じました。